

日本産シロチドリ *Charadrius alexandrinus* の分類と移動・渡り

○ 茂田良光 (公財 山階鳥類研究所)・守屋年史・奴賀俊光 (バードリサーチ)・佐藤達夫・岩崎加奈子 (行徳野鳥観察舎友の会)

日本国内で繁殖するシロチドリは、ブラキストン Captain T.W. Blakistonが青森で1876年4月23日に採集した標本に基づき、青森を基産地として Deignan (1941) により日本固有の新亜種 *C. a. nihonensis* として記載された。日本鳥学会 (2012) は「日本鳥類目録 改訂第7版」で、日本固有亜種のシロチドリ *C. a. nihonensis* を日本産亜種として認めず、日本産シロチドリの亜種を *C. a. dealbatus* としている。

しかし、*C. a. dealbatus* は、Kennerley, et al.(2008)が明らかにしたように、Swinhoeが1861年5月に廈門で採集した標本に基づいてシロチドリとは別種 *Aegialites dealbatus* として記載した鳥とされる。現在、この種は *Charadrius dealbatus* カオジロ(シロ)チドリとしてシロチドリとは別種とされるが、シロチドリの亜種とされることもあり、今後の研究が必要である。

日本産シロチドリは日本全国で繁殖し、北海道と南千島では夏鳥、本州以南では留鳥である (日本鳥学会 2012)。近年減少傾向にあり、環境省レッドリストでは、絶滅危惧 II 類 (VU) として掲載されている (環境省自然環境局野生生物課 2015)。我々は、千葉県九十九里浜の砂浜環境で、シロチドリの繁殖状況調査を実施している。2015年の繁殖期 (4月-7月) には、35個体の繁殖参加個体を捕獲・計測し、環境省リングとカラーリングを装着して放鳥した。非繁殖期 (8月-1月) における観察回収は18例あり、鹿児島県、宮城県、三重県、千葉県などから観察報告があったほか、越冬期にも継続して九十九里浜に滞在していた個体も観察された。北海道や南西諸島、国外からの報告はなかった。2016年の繁殖期には、九十九里浜周辺において11個体が観察され、帰還率は約31.4%であった。

山階鳥類研究所が取得しているシロチドリのバンディング・データによれば、北海道で繁殖する個体が、熊本県荒尾干潟で続けて越冬した例が確認され (環境省自然環境局野生生物課 2012, 2013, 2014)、また、荒尾干潟で繁殖するシロチドリには、荒尾干潟で越冬する個体もあることが確認されている。九州以北で繁殖するシロチドリは、九州よりさらに南方に移動した例は得られていない。北海道、青森県、秋田県、宮城県、石川県、茨城県において繁殖した後に1,000 km 以上離れた荒尾干潟などの越冬地まで渡る個体がいるが、関東地方には繁殖後もほとんど移動しない留鳥もいる (山階鳥類研究所 2007)。

沖縄県で繁殖するシロチドリは、国外に渡った回収例は知られていないが、台湾彰化縣 Changhua County, Hsin Bau (24° 00'N, 120° 20'E) で2007年8月7日に放鳥された幼鳥 (足環番号 C 15703, Flag: AH) が、2009年4月4日から同年 5月9日まで石垣市で観察・撮影されている。沖縄県で繁殖するシロチドリは、九州以北のシロチドリより上面がやや淡色で雌雄とも額、過眼線、胸が淡い傾向があり、*C. a. nihonensis* とは異なる亜種の可能性がある。シロチドリの台湾産の亜種、中国南東部と韓国産の亜種も現在、*C. a. dealbatus* とされており、日本産亜種、とくに南西諸島の個体群との比較・検討が必要である。